

「男、突つ走る！」

スペシャル

第一稿

作・壽倉 雅

| 山山 | 二色 | 志濱門辺 | 本本色 | 眞榮田 | 中植北野 | 安山奥船倉 | 若村 | 木木内内 | 木木木内内 | 木内 |
|--------------|---------------|----------------|---------|---------|-----------------|---------------------|--------------|--------------|--------------|------|
| 良恒 | 知永 | 悠寧賢喜々哉 | いろは美 | 明浩 | 雪 | 和拓裕篤 | 素子 | 好彦 | 健次郎 | 真孝也 |
| 太吉 | (49 82) | (55 28 28 28) | (1 27) | (享年 27) | (32 28) | (也海 司志 28 28 28 28) | (55) | (乃藏 82 87) | (24 55 57) | (28) |
| 恒吉の息子／造船会社社長 | 好乃の同級生／造船会社会長 | ニシキエンターティメント社長 | 元中央高校生徒 | 元中央高校生徒 | 元名古屋カフエ調理専門学校学生 | 元名古屋芸術専門学校学生 | 元名古屋芸術専門学校学生 | 元名古屋芸術専門学校学生 | 元名古屋芸術専門学校学生 | 脚本家 |
| | | | 元中央高校生徒 | 元中央高校生徒 | 明美の娘 | 浩平の母 | 雪奈の婚約者 | | 雅也の祖父 | 雅也の父 |
| | | | | | | | | 雅也の叔母、孝志の妹 | 雅也の母 | 雅也の母 |

1 広島・海水浴場（夜）

T『2023年 10月』

雅也がぼんやりと座っている——顔に
霸気がなく、無表情で呆然としたまま
である。

雅也、鞄の中から写真立てを取り出す
——雅也と浩平のツーショット。

雅也「眞榮田、俺、そっち行つて良いかな：」

⋮

2 木内家・事務所（夜・回想）

T『1年前』

雅也がパソコンで仕事をしている——
スマホの通知が鳴る。

雅也「（スマホの画面を見て）えツ⋮⋮」

浩平のSNSアカウントの投稿画面——

浩平の母・恵（53）の声が流れる。

恵の声（投稿の文章）「浩平の母です。息子
が今日の夕方亡くなりました。これまで息
子と仲良くしてくださった皆様に、この場

を借りて感謝申し上げます」

雅也、慌ててスマホで電話をかける。

3 道（同）

地下鉄の駅から地上に上つてくる雪奈
——スマホの着信が鳴り、出る。

雪奈「もしもし、うつちー。どうしたの？」

少しの間。

雪奈「うつちー？」

雅也の声「あのさ、ゆきちゃん。落ち着いて
聞いてね」

雪奈「……？」

4 木内家・事務所（同）

スマホで電話をしている雅也。

雅也「眞榮田が、亡くなつたつて……」

雪奈の声「うそ……」

雅也「ゆきちゃんに連絡しようかどうか迷つ
たんだけど、伝えといったほうが良いと思つ
て」

5 道（同）

スマホで電話をしている雪奈。

雪奈「……」

雅也の声「明日、鈴本先生に電話して、お葬式のこととか、確認してみる」

雪奈「うん。詳細分かたら教えて」

雅也の声「分かった。じゃあ、また連絡する」

雪奈「ねえ、うつちー」

雅也の声「どうしたの？」

雪奈「ありがとうございます、連絡してくれて。もし、あいつが亡くなつたこと知らなかつたら、一生後悔するところだつた」

6 木内家・事務所（同）

スマホで電話をしている雅也。

雅也「良いよ……。ちょっと、心の整理つかない……。（と涙ぐみながら）じゃあね、おやすみ」

と、電話を切ると、愕然としたよう

溜め息をつく。

7 葬儀会場・表（同）

乗用車が入ってきて、運転席から雅也、助手席から雪奈が出てくる。

8 同・ホール（同）

雅也と雪奈が入ってくる——祭壇の真ん中に、大きく浩平の遺影が飾られている。

雅也が呆然と遺影を見つめ、雪奈が泣きながら口を押える。

雅也「眞榮田……」

と、椅子に座っていた恵が気づいて振り返る。

恵「木内さんですか」

雅也「はい」

恵「浩平の母です。ご連絡ありがとうございました。（と供花台を振り向き）お花までご用意くださって、息子も喜んでると思いま

ます」

雅也「いえ……」

雅也、隣で泣いている雪奈をやりきれないよう見つめる。

9 フアミレス・全景（同）

10 同・店内（同）

雅也と雪奈が話している。

雪奈「今でも信じられない、あいつが亡くなつたなんて」

雅也「そうだね……」

雪奈「昨日、あいつが夢に出てきたの。背中をポンと押されてね、それで振り返つたら、もうあいついないんだよ」

雅也「ゆきちゃんも見たんだ」

雪奈「え、うつちーも？」

雅也「うん。俺は、学生時代の何気ない日常の夢だった。みんなで食堂に集まつてご飯食べたり、中庭で他愛もないおしゃべりし

てる、本当にあの時の生活の一部を見てる
ような感じの」

雪奈「それって、いつの光景？ 私と浩平が
まだ付き合ってた頃？」

雅也「んー、どうだろう。けど、二人とも仲
良さそうだったから、きっとあれは、一年
生の半ば頃かな」

雪奈「あの時が一番楽しかったなあ。卒業し
てまだ十年も経つてないのに、懐かしい気
がする」

雅也「そうだね。大変なこともあつたけど、
今となつては全部良い思い出。おじいさん
おばあさんになつても、こういう思い出話
がもつとできると思つたんだけどね……ま
さか浩平が亡くなるなんて思わなかつたし」

雪奈「あいつが脳腫瘍で療養中だつたつて話
はうつちーが前に教えてくれたでしょ。で
も、いくら何でも早過ぎるよ」

雅也「昨日も言つたけど、正直ゆきちゃんに
連絡しようかどうか迷つた。ゆきちゃんに

は、もう猛さんっていう立派な婚約者がいるわけだし」

雪奈「連絡くれたこと、本当に感謝してる。

今日、お通夜に参列できて良かった」

雅也「そつか……」

雪奈「明日の告別式は行けないから、私の分まで、お見送りお願ひね」

雅也「うん。明日はやつすーも来るし、千葉からぐっしが来て、京都からあつぽんが来て、沖縄に行つたおつくーも来てくれるからね。みんなで、最後の見送りしてくるよ」

雪奈「（目を潤ませて）あいつも、みんなに見送られて喜ぶと思う」

雅也「……」

11 葬儀会場・全景（翌日・回想）

12 同・ホール

浩平の告別式が行われている——それぞれ椅子に座つて合掌している雅也、

篤志、裕司、拓海、和也、恵、その他
弔問客たち。

13 同・表

恵の乗った車と、靈柩車が出発してい
く——合掌して見送る雅也、篤志、裕
司、拓海、和也。

雅也、涙が止まらず、ずっと泣いてい
る——後ろにいた篤志が肩を抱き、

篤志「思いつきり泣けば良いさ。そこまで泣
いて見送つてもらえて、眞榮田は喜んでる
だろうよ」

裕司「あいつのことだ。いつまで泣いてる
だつて思つてるかもしねえぞ」

拓海「それ、あり得るな」

和也「眞榮田なら言いそうだ」

雅也「(涙を拭きながら) そうだね。あいつ
っぽいね」

浩平との写真立てを見ている雅也。

雅也 「眞榮田。俺、いつからおかしくなつち
やつたんだろうね……」

雅也 、溜息をつくと、目を瞑る。

15 ニシキエンター・ティメント・事務所（回
想）

雅也が入つてくる。

雅也 「おはようございます」

デスクに座つている社長・二色知永

（55）が不機嫌そうに立ち上がり、
知永「おい木内。何で楽屋が一個しか取れて
ねえんだよ。さつき、会場からの確認電話
があつたけど、どうなつてんだ」

雅也 「会場費浮かせるために、イベントキヤ
ストの楽屋は一つで良いって言つたのは社
長じやありませんか」

知永「そんなこと私が言うわけないだろ。人
のせいにするな」

雅也 「でも確かにそうやつて……」

知永「（書類で雅也の顔を叩き） いちいち口
答えするなッ」

雅也の眼鏡が吹き飛ぶ。

知永「お前みたいなガキが私によくそんな生
意気な口答えができたもんだな」

雅也「（睨めつけて）……」

知永「何だよ、その目は。言つとくけどな、
お前一人海に沈めることぐらい、私の繫が
りじや何とでもなるからな」

雅也「それは、僕に死ねってことですか？」

（と苛立ちながら眼鏡を拾つてデスクに座
ると）このイベントだって、ほとんど僕が
準備してるようなもんじやありませんか。

社長はプロデューサーって言つておきなが
ら、会場との打ち合わせやスタッフミーテ
ィングをドタキャンして全部僕に押し付け
て。僕はこのイベントの構成作家として関
わつてるんです。社長のパシリになつたわ
けじやありません」

知永、憤然と雅也が座つて いる椅子を

蹴る。

知永「それがお前の本心かツ。人が金払つて使つてやつてるのに、偉そうに構成作家なんて名乗るな。てめえみたいな奴、一人で何もできないだろ」

雅也「（勢いよく立ち上がって）一人で何もできないのは社長も同じでしょ。前回のイベントの赤字補填だつて、僕が社長にお金貸したから何とかなつたのに。それだつてまだ返してもらつてないんですよ。こんなこと言いたくないですけど、社長のやり方は無謀すぎます。こんなやり方じや、常駐スタッフがいなくなるのだつて無理ありますせん」

知永「ああ、うるさいツ。興行をする私の気持ちなんか分からぬいくせに、金払うこつちの身にもなれよ」

雅也「こつちは、ボランティアで働いてるわけじやないんです。いくら地域を盛り上げるイベントだからって、予算がないなら、

もつと身の丈にあつたものを……」

知永、テーブルの書類をまき散らして、

知永「ああ、いちいちお前の言うことは瘤に障るなッ。これ、お前が拾えよ」

雅也「……」

知永「何でお前みたいな奴と一緒に仕事しなくちゃいけないんだろ。邪魔でしうがねえわ。首くくつてくれねえかな。お前の顔なんか見たくもない」

雅也「……」

知永「そういえば、お前去年、友達亡くしたつて言つたよな。何でお前が死ななかつたんだろうな」

雅也「……！」

知永「頼むから消えてくれねえか」

雅也、諦めたように荷物をまとめようとする。

知永「ちよつと待て。スマホとノートパソコンは置いてけ」

雅也「は……？」

知永「スマホもパソコンも、このイベントの情報や連絡先が入ってる。持ち出したら、情報流出でお前を訴えるからな」

雅也「スマホもパソコンも、自分の名義で自分で買ったものです。社長の勝手にはなりません」

知永「いいから出て行けよ」

と、無理やり雅也の腕をつかむ。

16 同・表（同）

知永に突き飛ばされて、雅也が倒れこむ。

知永「その汚ねえ顔、二度と私に見せるな。死ねッ。友達の後でも追つたら良いだろ。とつとと消えろ」

と、ドアを閉める——呆然と寝転んだままの雅也。

17 広島・海水浴場（夜・回想戻り）

目を瞑つた雅也から涙がこぼれる——

雅也、目を開けると、鞄に写真立てをしまう。そして中から市販のカプセル薬とカップ酒を取り出す。

箱からカプセルを全部取り出し、カップ酒のふたを開けると、同時に口の中に含む。

そのまま海へ向かおうとすると、途中でフラフラとし始め、その場に倒れこむ。

18 木内家・表・玄関（翌日）

一台の乗用車が勢いよく入ってきて、助手席から雪奈、運転席から雪奈の婚約者・中北猛（32）が降りてくる。

雪奈、インター ホンを鳴らす——中から真保の声がする。

真保の声「はい？」

雪奈「あの、私、うつちー……じゃない木内君と同じ専門学校だった植野と言います。木内君いますか？」

と、勢いよくドアが開き、真保が出てくる。

真保 「息子のこと、何か知ってるんですか？」

19 同・事務所

真保、孝志、雪奈、猛が向き合って話している——真保、白い封筒を雪奈と猛に見せる。

真保 「これが、昨日普通郵便で届いたんです」

雪奈 「普通郵便？」

真保 「もしかしたら、もうあの子……」

雪奈 「え……」

孝志 「内容が、俺たち家族にあてた遺書だつたんです」

雪奈 「遺書って……」

真保 「どこに行つたのか、連絡もつかなくて

……」

雪奈 「実は、先週のことなんですけど、仕事のことで悩んでるみたいだつたので、ご飯に誘つたんです。でも、やっぱり仕事が終

わりそうにないからって結局会えなくて」

孝志 「ここ最近、夜中に帰つてくることが続いてたんです。泊まりがけの時もあって、息子と顔を合わせることが、しばらくありました」

猛 「あの、連絡が取れないってことだったんですけど、SNSのことは何かご存じないでしようか？」

真保 「SNS……？」

雪奈 「私、各種SNSは全部うつちーと繋がってるんです。でも、三日前に突然全部のアカウントが削除されてたんです。京都にいる、もう一人の専門学校の友達がそれに気づいてくれて、それで私も、もしかしたらうつちーに何かあつたんじやないかと思つて、それで今日駆けつけたんです」

真保 「そうでしたか……」

猛 「遺書ということでしたけど、警察からは何か連絡ありましたか？」

孝志 「いや、今のところは……。三日前に仕

事で名古屋の方に行くから駅まで送つてほしいと頼まれて、それが最後になつたんですが、おそらくあれも、どこかへ行くための作り話だつたんだと思います。この手紙が届いてからすぐ、警察には捜索願を出しましたから、何かあつたらすぐに連絡が来るとは思うんですが」

雪奈「うつちー…」

猛「（雪奈を気に掛けながら）連絡がないといふことは、まだどこかで生きてる可能性だつてあると思いますから、お気を落とさずに」

孝志「ありがとうございます」

真保「人の目につかないところで、死んでたりすることも」

孝志「おい（とたしなめる）」

真保「だつて、じやあこの三日間、どこで何してゐるつて言うの」

孝志「…」

真保「（ハツと我に返り）あ、失礼しました」

雪奈 「いえ……。うつちーが無事であることは、私も祈つてますから」

真保 「ありがとうございます……」

20 街を走る乗用車

21 その車の中

運転席に猛、助手席に元気がない様子の雪奈。

猛 「大丈夫？」

雪奈 「うつちー、どこ行つちゃつたんだろ……頼むから無事でいて……」

猛 「あつぽんに連絡したら？」

雪奈 「あ、そうだつた……」

と、スマホを取り出して、電話をかけ
る。

22 京都・篤志のアパート

篤志がスマホで電話をしている。

篤志 「え、うつちーが……」

雪奈の声 「警察には捜索願出したんだって」

篠志 「行方不明ってことか……」

雪奈の声 「とにかく無事でいてほしい」

篠志 「なあ、確か仕事のことで悩んでたけど、もしかしたら、眞榮田のこともあるんじやないのか。来月で、もう一年経つだろ」

雪奈の声 「うん。私もそれが気になつた。でもだからって、そんな変な気起こさなくても良いのに……」

篠志 「冷静な判断ができないぐらい、うつちー、精神状態がおかしくなつてたんじやないのかな。SNSのアカウントを消したのも、きっとこれまでのものを全て消すつて意味合いがあるのかも」

23 乗用車の車内

雪奈がスマホで電話をしている。

雪奈 「やめてよ、そんなこと言うの」

篠志の声 「ごめん。でもさ、仕事の宣伝も兼ねてSNSでずっと情報発信してきたうつ

ちーがアカウントを消すつてことは、相當な覺悟だつたんじやないのかな。仕事も全

部放り出すことでもあるわけだし』

雪奈「それはそうだけど……眞榮田が亡くなつて、これでうつちーにまでもしものことがあつたら、私どうして良いか分かんない」

24 京都・篤志のアパート

篤志がスマホで電話をしている。

篤志「今はとにかく、うつちーの無事を祈るしかないな。俺たちにはそれぐらいのことしかできない。うつちーの家まで様子見に行つてくれてありがと。じやあ、また」

と、電話を切ると、本棚に目をやる——『うつちーコーナー』の紙が貼つてあり、雅也が作つたパンフレットやフリーペーパーが入つている。

篤志「うつちー、どこにいるんだよ……」

と、スマホを開き、飲み会の帰りに自己撮りをした雅也と雪奈と篤志が映る写

真を見つめる。

25

広島・海水浴場

一台の軽バンが停まり、運転席から釣りの装いをした山辺良太（49）が降りてくる——石壁を上り、周囲を見渡すと、何かの異変に気付く。その視線の先に、倒れている雅也の姿。

良太 「人か……？」

と、釣り竿を置くと、走つて雅也の元へ行く。

良太 「（雅也を抱えて）おいッ、しつかりしろッ、おいッ……」

26 同・山辺造船株式会社・全景

27 同・同・事務所

ソファードで眠っている雅也が、ゆつくりと目を覚まし、体を起こす——デスクで仕事をしていた良太が気づいて、

良太「おお、気がついたか」

雅也「ここは……？」

良太「うちの会社だ。山辺造船つて言うんじやけど、まあ、よそから来たもんは分からんじやろ」

雅也「……」

良太「海水浴場で倒れとったけえ、ここまで運んできたんじや。近くの診療所の先生に診てもろうて、胃洗浄したんじや。もっと見つけるのが遅かつたら命に関わることにもなつとつたけえ、良かつたわ」

雅也「……」

良太「何があつたか知らんが、自殺考えるなんて、よくよくのことがあつたんじやろ。せやけど、そんな姿見たら、好乃さん悲しむわな」

雅也「祖母を……知ってるんですか？」

良太「身元が分かるものないか、調べさせてもううたんじや。そしたら財布に免許証入つてて、住所が愛知じやつたつけ、しかも

名字が木内だつたから、うちの親父の小学校時代からの同級生の好乃さんとこの孫やないかと思つてな。今、親父が好乃さんを迎えて行つとる」

雅也「……」

と、事務所のドアが開き、良太の父・

恒吉（82）と好乃が入つてくる。

恒吉「（雅也を見て）おお、ようやく目覚めたか」

好乃「雅……」

雅也「おばあちゃん……」

好乃「あんた、何があつたんや」

恒吉「好乃ちゃん、今はそう聞かんほうがええわ。ゆつくりと休ませてやらんと」
好乃「そうやね……。（と雅也に）孝志に連絡しといた。あんた、死ぬつもりやつたんやつてね」

雅也「……」

好乃「しばらく、うちにおつたらええわ」

雅也「……」

好乃「ツネちゃん、良太君。ほんまにありがと。うちの孫見つけてくれて」

良太「いやいや。今日は仕事が休みやつたけえ、いつもみたいに釣りに行こう思うたら、こうなつたんじや。何はともあれ、この子の命が助かつたんじやけ、良かつたわ」

恒吉「体が思うようになるまで、もう少しここで休んでいつたらええわ。まあ夕方には帰れるじやろ」

雅也「……」

好乃「迷惑にならんかね」

恒吉「気にすることあれへんつて。人助けしたと思えば、何とも思わんけえ」

好乃「……」

雅也「……」

28 同・木内家・全景（夜）

29 同・同・台所

彦蔵がおでんの支度をしている——テ

ーブルに置いてある鍋敷きの上に、お

でんの鍋を乗せる。

彦藏 「（居間に向かって）おい、飯だ」

と、好乃が入つてくる。

好乃 「はいはい、ありがと」

彦藏 「雅、飯食えるんか？」

好乃 「ツネちゃんの会社で聞いたけど、あの子、二日も海におつて、その間、何も食べてへんつて」

彦藏 「なら少しでも食わしたほうが良いじやろ」

好乃 「そうじやね。呼んでくるわ」

30 同・同・居間

雅也が呆然としたまま、写真立てを見つめている。

雅也 「眞榮田、俺、死ねんかったわ……」

と、好乃が入つてくると、

好乃 「雅、晩御飯じや。今日はおじいさんが、おでんこさえてくれたわ」

雅也 「そう……」

好乃 「少しでも食べんと、ようならんで」

雅也 「（渋々）うん……」

31 同・同・台所

雅也、彦藏、好乃がおでんを食べている。

好乃 「よう染みてるな」

彦藏 「（耳を立てて）え？」

好乃 「（声を強めて）よう染みてるなって言

うたんじや」

彦藏 「当たり前じや、昼から仕込んだんじや

けえ」

雅也 「……」

好乃 「（雅也に）無理に食べんでもええから、
少しずつ食べたらよろしいわ」

雅也 「うん……」

32 木内家・玄関（夜）

スーツケースを持つた孝志が靴を履い

て いる——見送りに来 て いる 真保 と 健

次郎。

孝志 「じ やあ、向 こう 着 いたら また 連絡 する」

真保 「お 義父 さん と お 義母 さん に よろしく」

健次郎 「兄 貴 、 戻 つて 来 る の か ?」

孝志 「分 からん。 一旦 は、 あ いつ の 話 を 聞 い
て み な い と」

真保 「あ の 手 紙 に 書 いて あ る こ と が 本 当 だ
し た ら、 二 色 つ て い う 女 社 長 、 許 せ な い」

健次郎 「兄 貴 、 大 分 電 話 す る と き も 疲 れ て た
顔 し て た から な」

孝志 「専 門 学 校 卒 業 し て か ら、 ず つ と 突 つ 走
つ て き た ん だ。 こ こ で 少 し 休 ん で も 良 い ん
じ や ね え か な」

真保 「そ う ね」

孝志 「じ やあ、 行 つ て く る」

真保・健次郎 「行 つ て ら つ し ゃい」

ス ッ ツ ケース 持 つ て 出 て い く 孝志 。

真保と健次郎が戻つてくる。

健次郎「兄貴、無事で良かったな」

真保「けど、おばあちゃんの話じや、おばあちゃんの同級生の息子さんつて方が、海で倒れてる雅を見つけたらしいから、本当に死ぬ気だつたんだろうね。でも……（と涙ぐんで）生きてて良かった」

健次郎「兄貴には、早く元気になつてもらわないと」

真保「仕事のこと、どうするんだろ」

健次郎「スマホとパソコンがないと、何もできないもんな」

真保「スマホもパソコンも返してもらえないなんて、二色つて奴、一体何考てるんだろ」

健次郎「『ニシキエンターテイメント』って会社、調べてみたよ。（とスマホを見ながら）主に舞台公演とか音楽イベントを企画してるイベント会社らしい。この代表の二人色つて女は、タレントや女優もやつてたか

ら、自分でプロデューサーをしながらイベントにも出演して。兄貴はこのイベントを手伝つてたんだな。しかも、実質ボランティアで」

真保「手紙に、お金貸したり、経費の精算もされてないつて書いてあつたけど、そんなでよく会社できたわね。内容的に、雅が受けたのはパワハラでしょ。訴えられないかな」

健次郎「モラハラや人権侵害も入つてるだろ。兄貴のことだけじゃない、俺たち家族や友達のことだつて暴言吐いたつて手紙には書いてあつた。兄貴のことだ、自分のことは何を言われても家族や友達のことを悪く言われたことが許せなかつたんだろ」

真保「確かに、明日イベントの本番があつたんでしょ。それを投げ出してでも、死ぬことを選ぼうとしたなんて、相当追い詰められてたんだね。私、何にも気づいてあげられなかつた……」

健次郎「手伝いのスタッフはいるみたいだけど、常駐でイベントの全てを把握してるのは兄貴だけだったからな。スタッフの間じや、バタバタだろうな」

真保「人の息子をコケにした罰よ。雅に酷いことしたから罰が当たったの。バタバタして、苦しんだら良いのよ。雅だって散々辛い思いしてきたんだから。プロデューサーだかタレントだか知らないけど、私は絶対にあの女を許さないから」

健次郎「けど、スマホがないと、他の仕事先と連絡が取れなくなつて、今やつてる他の仕事できなくなるだろうな……」

真保「何もかも捨てるつもり、というか捨てざるを得なかつたんだろうけど、今の雅には、仕事を全て辞めさせて、心を治すことを優先したほうが良いわね」

健次郎「どんな仕事だろうが、兄貴が元気に生きてきえてくれたら、それで良いよ」

真保「そうね……」

34 広島の道（朝）

雅也と好乃が歩いている。

好乃「朝の散歩もええじやろ。ばあちゃん、免許返納してから、外に出ることが少なくなつたけえ、こうして毎朝散歩しよるんじや。運動にもなるし、気分転換にもなるけえの」

雅也「うん……」

35 広島・木内家・表

雅也と好乃が戻つてくる——孝志の車が停まつている。

好乃「ああ、孝志着いたんじやな」

孝志が運転席から降りてくる。

孝志「雅……」

雅也「父さん……」

雅也、孝志の元へ走つて、強く抱き着く。

孝志「生きてて良かつた」

雅也 「俺、死ねなかつた……」

孝志 「バカツ……死ぬやつがあるか」

雅也も孝志も、目に涙が浮かんでいる
——見守るよう^にその様子を見ている

好乃。

36 同・同・居間

雅也、孝志、好乃が話している。

孝志 「しばらく、雅こつちで預かつてもらえ
んか？」

好乃 「私は構わん。ここにおつて、少しでも
雅が元気になるんやつたら」

雅也 「……」

孝志 「こつちのことは気にしなくて良い。二
色つて女のことも、何とかこつちで話進め
るよう^にする。お前は何も考えず、ゆつく

り休め」

雅也 「うん……」

好乃 「雅、これはあんたの人生なんやから、
マイペースでいつたらええんやで」

雅也 「……」

好乃 「今日であんたは一回死んだ。今日から生まれ変わつたつもりで、人生やり直すんや」

雅也 「おばあちゃん……」

と、台所から彦藏がやつてくると、

彦藏 「昼飯、昨日のおでんの残りでええか？」

好乃 「大将に任せます」

孝志 「わしも食うぞ」

彦藏 「お前も食うんか」

孝志 「当たり前やないか」

彦藏 「せやつたら、具材追加せなあかんな。

こいつようけ食いおるで」

孝志 「失礼な」

好乃 「あんた、少しは瘦せたんか」

孝志 「これでも大分落としたほうやわ」

好乃 「ほとんど変わつてへんやないか」

彦藏 「好き勝手するのはええけど、真保さん悲しませたらあかんで。ええ娘さんに嫁に来てもうたんじやけ、大事にせんと」

好乃「（小声で）誰が言いよるんじや」

彦藏「とりあえず、卵とちくわ増やすかの

（と台所へ戻つていく）」

37 同・同・台所

雅也、孝志、好乃、彦藏がおでんを食べている。

雅也（N）「父にとつては八年ぶりの実家帰省であったことから、二日間に渡つて地元に残つた同級生や知人に顔を見せた後、愛知に戻つていきました。そして僕は、三週間後に再び父が迎えに来るまでの間、祖父母の元で静養することになつたのでした」

38 同・全景（数日後）

39 同・同・居間

雅也がぼんやりとテレビを見ている
—台所から好乃が顔を出すと、

好乃「雅、少し早いけど、三時のおやつにし

ようか

雅
「うん」

40 同・同・台所

向き合うように座った雅也と好乃が、
コーヒーを飲みながらカステラをつま
んでいる。

好乃「なあ雅」

雅也「……？」

好乃「こんなこと聞くのは何じやけど、どう
してこつちで死のうと思うたんじや」

雅也「何でだろう……でも、気がついたら新
幹線に乗つて、広島に来てた。生まれ育つ
たのは愛知だけさ、何と言うか、この島
がさ、原風景みたいに思えてね。それに、
あの海水浴場の隣には、昔亡くなつたひい
おばあちゃんの家があつたでしょ。子ども
の時、親戚でひいおばあちゃんの家に集ま
つて、海水浴場で遊んだじやん。思い出の
場所で死ねたらと思つたんだけど、もしか

したら、ひいおばあちゃんが止めてくれたのかな。まだ死ぬのは早いって」

好乃「きっとそうじや。娘である私がまだ生きてるのに、ひ孫が先にこられたらびっくりするじやろ。よう止めてくれたつて、感

謝せなあかんわ」

雅也「これから、どうしたら良いのか、まだ分かんないんだけどさ……」

好乃「無理に決めんでもええわ。言うたじやろ、マイペースで行つたらええんやから」

雅也「うん……」

雅也（N）「祖母にそう慰められたものの、僕は結局自分でどうして良いのか分からない今まで、時折やはり死を選ぶことを考えることも続いていました。そして三週間後、父の迎えで再び愛知に帰つた僕でしたが：

⋮
⋮

気飲みをする雅也——傍らの健次郎が
難しい顔をしている。

健次郎「兄貴、昼間つからそんなに飲むこと
ないだろ」

雅也「うるさいッ。俺みたいなやつが生きて
たつて、何にもならないんだ。こうしてい
るだけで、俺は家族のお荷物になつて、迷
惑をかける。あの時、死んどけば良かつた
んだ」

健次郎「……」

雅也、立ち上がって台所へ行くと、冷
蔵庫から缶ビールを取り出して、ふた
をあけて飲み始める。

健次郎「兄貴……」

と、真保が帰宅する。

真保「ただいま。ごめん、ちょっと仕事長引
いやつて」

健次郎「（真保に）あれ見てみろよ」

真保、台所を見ると、缶ビールを飲ん
だ雅也がふらついている。

真保「どうしたの？」

健次郎「昼間から酒飲みまくつてるんだよ」

真保「え？」

雅也「飲まないとやつてられないこともあるんだよ。ああ、どうして俺みたいな奴が生まれてきちゃつたんだろうな。他に死ねる方法ないかな」

真保「……」

健次郎「……」

雅也「楽に死ねる方法調べようかな……（と嘲笑うように）あ、そつか、スマホもパソコンもないんだった」

真保「……」

と、バイクの音が外から聞こえ、インター ホンが鳴る。

真保「私出てくるわ」

と、出ていく——不安そうに雅也の様子を伺っている健次郎。

真保、封筒を持ったまま憤然と戻つてくると、

真保 「二色の代理人弁護士から、通知書が来たわ」

健次郎 「え？」

真保 「見てよ、この内容ツ」

健次郎 「（書類を見て）損害賠償を検討しているところですって……兄貴を追い出した

のは自分だろ。何で被害者面してるんだよ。

（と文書を見ながら）『引き継ぎが行えず、イベント業務において多大な損害を被つた』

つて、こんなのがふざけてるわ』

真保 「父さんが帰つたら相談しよ」

健次郎 「うん」

雅也 「二色はそういう女なんだよ。自分のしたことを棚に上げて、自分がだけが被害者面するんだよ。さすが女優だよ、可哀想な自分が演じるのが上手いんだから」

真保 「……」

健次郎 「……」

雅也 「てか、俺に死ねって言つたのに、その相手に損害賠償させるなんて、どういう思

考してゐるだらうね。死んだらこれまでのギヤラや立替経費を払わずに済むからラツキーと思つただろし、生きてたら今度は損害賠償で更に金を取ろうとする。あの女がここまで押金主義者だとは思わなかつた。本当、とんでもない女だよ」

と、冷蔵庫から缶チューハイを取り出し、飲み始める。

真保「（雅也を止めて）もうそれぐらいにしきなさい」

雅也「あの女のことを考えると、頭がおかしくなりそうなんだよ。酒飲まないと、次は俺、何するか分かんない」

真保「……」

健次郎「……」

足がふらつきながらも、缶チューハイを飲み続いている雅也。

好乃「雅、大丈夫じやろか」

彦藏「…」

好乃「もう少し、こつちでゆつくりさせても

良かつたかもしねへんなあ」

彦藏「雅なら大丈夫じや」

好乃「え…？」

彦藏「あいつはわしの孫で、孝志の息子じや。
ひのえうまの孝志の息子が、いのしし年の
雅なんじやけ、ちやんとやつてくれるじや

ろ」

好乃「（小声で）そんなんやつたら、誰も苦

労なんかせえへんわ」

ブツブツ文句を言つたままの好乃。

43 京都・篤志のアパート（朝）
篤志が出かける支度をしている——スマホの着信が鳴り、出る。

篤志「（電話に）もしもし。ああ、おはよう、
ゆきちゃん。ああ、今から仕事行くところ。
いや、俺のほうにも何の連絡もないよ。そ

うだよな、もう一ヶ月ぐらいになるか、う
つちーと連絡つかなくなつてから。⋮⋮そ
つか、まあ今日ゆきちゃんがまた行つてみ
て、何か進展があれば良いけど。うん、よ
ろしく。じやあまた。（と電話を切ると）
うつちー、どうしちやつたんだよ⋮⋮」

44 木内家・居間（夜）

真保が台所で食器洗いをしている——

雅也が覇氣もなくテレビを見ている。

と、ドアが開き、出かける支度をした

健次郎が入つてくる。

健次郎「じやあ、夜勤行つてくるわ」

真保「いつてらっしやい」

雅也「（元気がなく）いつてらっしやい」

健次郎「行つてきます（と出でいく）」

雅也、気だるそうにリモコンを持つて
チャンネルを変えると、玄関から健次
郎の声が聞こえる。

健次郎の声「兄貴。植野さんって人が来てる

ぞ」

雅也 「ゆきちゃん……」

真保 「……」

45 同・玄関

雅也がやつてくると、ためらいながら
もドアを開ける——雪奈と猛が立つて
いる。

雅也 「ゆきちゃん……」

雪奈、その場に泣き崩れる。

雅也 「……」

雪奈 「良かつた……無事で……」

雅也、しやがみこんで、

雅也 「ごめん、ゆきちゃん……」

雪奈 「もうバカッ……。私が、どれだけ心配
したと思つてんのッ……」

雅也 「ごめん……」

猛 「いやあ、本当に無事で良かつた」

雅也 「猛さんにも、ご心配おかげしまして……」

⋮

雅也、雪奈と猛が向き合つて話している。

雪奈 「そんなことになつてたんだ……」

雅也 「連絡しようと思つても、スマホが手元にないでしょ。だから、連絡したくてもできなかつたの。俺が広島にいた時、父親からゆきちゃんが家に来たことを聞かされたから、こつちに戻つてきたら、ゆきちゃんにはまず連絡しなきやと思つてた。でもスマホがないとき、仕事どころか何もできないでしょ。すっかり生きる希望もやる気も失つて……（と苦笑して）まあ、落ちぶれたつてやつよ」

雪奈 「私、眞榮田のことがあつたから、後を追うんじやないかと思つてたけど、まさか本当にそんな気でいたなんて……」

雅也 「遺書も書いたぐらいだからね……」

雪奈 「うつちー……そんなの書くもんじやな

いよ」

雅也「分かつてるよ。でも、例のプロデュー
サーからいろいろ言われたら、精神崩壊も
するしさ」

雪奈「……」

雅也「言葉を武器に商売してた俺が、凶器に
なった言葉に刺されたようなもんだよ」

雪奈「結構、言われたんでしょ？ SNSの
投稿にも、人格否定されたって書いてあつ
たじやん」

雅也「うん……。結構言われた」

47 ニシキエンターテイメント・事務所（回
想）

知永が雅也に怒鳴っている（雅也の視
点になるカメラ目線）。以下、知永の
セリフのカットバック。

知永「お前ほど使えない作家は初めてだわ」

×

×

×

知永「こんな出来損ないな人間を産んだお前

の親の顔が見てみたいわ。まあ、『この親にしてこの子』って言葉の通り、お前の親も大した人間じやないんだろうな』

知永「お前が関わってるイベントなのに、友達一人も誘えないってどうなってるんだよ。見に来てくれないってことは、お前との関係性はその程度の大した友達じやないってことだぞ。仲良しごっこならやめちまえッ」

卷之三

小学校からやり直せツ」

印
く
「
う
前
は、
章
さ
、
首
は
、
二
、
一

知元一曰不語才大而不名‘

知永「お前の目が気に入らない。顔も気持ち

× 悪いな」

知永「誰もお前のことなんて信用してねえよ」

× × ×

知永「お前とかかわるとロクなことねえわ。

お前が関わるようになつてから、このイベントの売り上げが落ちたんだよ。お前は貧乏神だよ。この貧乏神が。とつとと失せろ」

48 木内家・事務所（回想戻り）

雅也「……」

猛「酷い話だね……それじやあ、うつちーがそういう精神状態になるのも無理ないよ」

雪奈「……」

雅也「百歩譲つて、自分のことは悪く言われても耐えられたかもしれない。けど、家族や友達のことまで悪く言われて、限界だった。死のうと思ったのは、眞榮田のことを言わされたから」

雪奈「え……？」

雅也「あいつが亡くなつた時、ちょうど前回のイベントの本番の直前だつたんだよ。だ

から、お通夜と葬式に出るためには、こつち

の事情を話したから、少なからず俺が同級

生を病氣で亡くしたことは知つてたの？」

雪奈「それで、あの女は何て言つたの？」

雅也「（大きな溜息をついて）えつとね……」

×

×

（フ ラ ツ シ ュ ）

ニシキエンター テイメントの事務所の

雅也と知永。（シーン15 より）

知永「何でお前みたいな奴と一緒に仕事しな
くちゃいけないんだろ。邪魔でしそうがね
えわ。首くくつてくれねえかな。お前の顔
なんか見たくもない」

雅也「……」

知永「そういえば、お前去年、友達亡くした
つて言つたよな。何でお前が死なかつた
んだろうな」

×

×

雅也「……」

雪奈「許せない……そなこと言つてうつち

ーを追い詰めたなんて」

猛 「よく無事だつたね、本当に……」

雅也 「ゆきちゃんにだから言うけど、そのプロデューサーから、損害賠償を検討しているっていう通知書が、この間届いたの」

雪奈 「だつて、うつちーのほうが損害賠償請求しても良い立場じやん」

雅也 「まあそれはそうなんだけど、向こうとしては俺がいなくなつたことでイベント運営ができなくなつたから、それに対する損害賠償らしい」

雪奈 「そんな……」

雅也 「俺が死んでたら、きっとそういうことはしないとは思うんだけどさ」

猛 「もしかして、それガスライティングじゃないかな」

雪奈 「ガスライティング……？」

雅也 「……？」

猛 「一種の精神的洗脳みたいな感じでね、自分に逆らえないようにさせて、それで精神

的に相手を追い詰めてく心理攻撃だよ。相手を破滅させることを目的にしてるらしい」

雪奈「まあ、ある意味ではうつちーを破滅させたようなものか」

猛「職場だつたら、それこそ相手を退職に追いやつたり、最悪の場合、相手が自殺することもある。正直言い方は悪いけど、間接的に自殺させようとしてるってことだね」

雪奈「まんま、今のうつちーじやん」

猛「うつちーの話を聞いてて、ふとそう思つたんだよ」

雅也「そつか……確かに、向こうからしたら、俺に死んでもらつた方が得することが多い」

雪奈「どういうこと？」

雅也「俺、あのプロデューサーから一銭もギヤラ払つてもらつてないし、ポスターやチラシとかの制作費とか、立て替えた印刷費もね。それに、イベントが赤字になつたから、俺プロデューサーに二十万円貸したの。それも返済されてない」

雪奈「お金貸した相手に、そんな攻撃するな
て、どういうつもりなんだろ」

雅也「そういうえば、急に当たりが強くなつた

り、攻撃し始めたのは、俺がその二十万円
を貸してからだ……」

猛「多分、それがガスライティングするきっ
かけになつたんだと思うよ」

雅也「……？」

猛「そのプロデューサーからしたら、自分が
恥をかくのを承知で、うつちーからお金借
りたわけでしょ。その行動が屈辱になつて、
その恨みをうつちーにぶつけたんじやない
かな」

雅也「そういうえば、『こつちはお前に下げた
くない頭下げて金借りてんだッ』って怒鳴
られたこともありました」

猛「ギャラとか制作費とか、プロデューサー
が本来うつちーに払うべきお金って、結構
な金額になるんじやない？」

雅也「ほほ三桁に行くぐらいです」

雪奈「そんなにツ⋮⋮⋮？」

猛「それだけの金額をうつちー一人に払うわけでしょ。でも、もしここでうつちーが死んだら、そのお金は払わずに済む。ガスライティングをする目的は、そこだつたんだよ」

雅也「なるほど⋮⋮⋮」

雪奈「お金払いたくないから、うつちーを精神的に追い詰めて自殺させようなんて、人間のすることじやないわ⋮⋮⋮」

雅也「⋮⋮⋮」

雪奈「そっちのことは、まだ解決できないかもしれないけどさ、せめて何かうつちーと連絡できる手段があれば良いんだけどね」

雅也「スマホはさ、パスワードを教えるように言われてたんだよね。だから、それでアカウントを削除したんじやないかな。まさかそこまでするとは思わなかつたけど」

雪奈「仕事関係者から何の連絡がないのも、きっとうつちーのスマホからいろいろ連絡

したんだろうね」

雅也 「この間、母親から聞いたんだけど、『スリジエネ』の活動も、もう終わったんだって」

雪奈 「『スリジエネ』って、うつちーがメンバーやつてた、あのパフォーマンスグループだよね。舞台とかやつてた」

雅也 「うん。俺、そこで広報担当常任理事兼事務局長っていうのをやつてたんだけど、去年から総務会計担当の常任理事も兼任してたんだよ。会計担当だった俺が消息不明になつたら、何の引継ぎもできないからね。そこで一緒だつた子どもたちは、きっと俺のこと恨んでると思う。俺のせいで、せつかく活動してたグループが解散することになつたんだから」

雪奈 「あんなに、楽しくやつてたのにね。直接は見れなかつたけど、YouTubeチャンネルは登録してたから、私いつも見てたの」

雅也 「全部失うと、こんなにも辛いんだなと

思つてき。不本意ながらも、自分に原因があるつてなると尚更……」

雪奈「辛いかもしないけど、リセットするしかないよ。SNSもアカウントが全部消えちゃつたのなら、新しく作り直せば良いし」

雅也「スマホもパソコンもないんじや、どうしようもないけど……」

猛「タブレットとか、持つてないの？」

雅也「タブレット……？ あ……」

と、デスクの引き出しの中から、タブレットと充電器を取り出すと、繋げて電源を入れる。

雅也「あ、良かつた。このタブレット、まだ使える」

雪奈「使つてなかつたの？」

雅也「仕事で使うかもと思つて、中古で買つたんだよ。でも、ほとんど使うことがなくてさ。（と起動したタブレットの画面を見て）SNSのアプリはダウンロードしてあ

るから、これでもう一度アカウント作り直せば良いかな」

雪奈「そうだよ。今回のことでのうつちーがいなくなつたことを知つてるのは、専門学校のメンツだと、私と京都にいるあつぽんだけ。だから、アカウントが凍結したから作り直したつてみんなに言つとけば、多分大丈夫だと思う。LINEも同じようにしつければ大丈夫でしょ」

雅也「ありがと、そうしてみる。まあ、このタブレットはネット環境があるところじやないと使えないから、ちよつと不便かもしれないけど」

猛「損害賠償の通知送つてくるより、スマホとかパソコンを返却してほしいよね」

雪奈「何で返却しようとしないんだろ」

雅也「メールのやり取りとか企業秘密になる情報の流出を避けるため、みたいなそれっぽい理由を並べそう。あのプロデューサー、そういう屁理屈並べるのだけは上手いから」

猛 「それに、ガスライティング、あるいは、うつちーに攻撃したパワーハラミみたいな証拠が出てくるかもしれないから、それを見せたくないっていうのもあるだろうね。自分が不利になる証拠を、わざわざ相手に返すことではないだろうし」

雪奈 「けど、そもそもスマホはうつちーが自分で契約して、自分で携帯料金払つてるやつでしょ。会社支給の携帯電話じやあるまいし、やつてること滅茶苦茶じやない」

猛 「一筋縄では行かない相手だろうね」

雅也 「そうですね……」

雪奈 「うつちー、何かメモできる紙とペンつてある？」

雅也 「ああ、あるよ」

と、デスクのボールペンとメモ帳を雪奈に渡す——雪奈、メモ帳にSNSのアカウント名を書く。

雪奈 「これ、私のアカウント名。無事にアカウントできたら登録しといて。同級生たち

は、私のアカウントのフォロワーのところから見つければ、順番にフォローできるでしょ」

雅也「ありがとう。後で登録しとく」

雪奈「ねえ、年末にまた同期たちの飲み会やるけど、うっちー来れそう?」

雅也「うん、行く」

雪奈「じゃあ、お店とか決まつたら連絡するね」

雅也「ありがと。みんなに会えるの、楽しみにしてる」

雪奈「うっちー」

雅也「……?」

雪奈「もう二度と変な気起こさないでね」

大きく頷く雅也。

49 居酒屋（夜）

雅也、雪奈、篤志、裕司、拓海、和也、その他同級生たちが集まっている。

拓海「（裕司に）おつくーは、いつ沖縄に戻

るんだ？」

裕司「まあ今回は少しゆっくりして、年明け五日でも帰ろうかな。ぐつちは、いつ千葉に戻るんだよ」

拓海「俺は三箇日終わったら戻るよ」

和也「卒業してから、本当にバラバラになつちやつたよな」

雅也「それでもさ、こうやつて定期的に集まれて良いと思つてるよ。コロナの時なんか、会食は四人までなんて謎のルールがつて、こんな風にみんな揃つて集まれることなかつたじやん。ようやく、この一年ちよいで少し緩和されたわけだし」

雪奈「本当に良かったよね」

篤志「(一同に)年末だし、今日これ終わつたら、二次会でカラオケでも行くか」

一同「異議なし」

50 カラオケ店・一室(夜)

裕司が歌つている——雅也、雪奈、篤

志、拓海、和也、その他同級生たちが
それぞれジユースを飲んだり、一緒に
ノリながら手拍子をしている。

× × ×

それぞれ荷物を持って軽く片付けをし
ながら出ていく雪奈、裕司、拓海、和
也、その他同級生たち——その場に残
る雅也と篤志。

雅也 「あつぽん……」

篤志 「……」

雅也、篤志に抱き着く。

雅也 「ごめん……心配かけて」

篤志 「良いよ、うつちーが無事で良かつた」

雅也 「あのさ、俺……」

篤志 「何も言わなくて良い」

雅也 「……」

篤志 「大体のことは、ゆきちゃんから聞いた。

二回も同じようなこと話すと、フラッシュ
バックみたいになつて、もつとうつちーが
辛くなるだろ」

雅也 「……」

篤志 「いろいろ辛かつたとは思うけど、これからもこの飲み会にはちゃんと来てくれよ。」

俺とゆきちゃんと、また幹事やるから」

雅也 「いつの間にか、あつぽんたちに任せっきりになっちゃってたね。俺たち三人のグループLINEも、気がついたら主として動いてるのはあつぽんになつてた」

篤志 「良いんだよ。俺は好きでやつてるんだから」

雅也 「ありがと」

篤志 「うつちーが生きてくれさえいてくれれば、それで良い」

雅也 「あつぽん……」

篤志 「時間はかかるかもしれないけど、早くいつものうつちーみたいに元気になつてくれよ」

雅也 「うん……」

と、裕司が入つてくると、

裕司 「どうした？ もう会計するつてさ」

篤志「悪い悪い。人数多いから、忘れ物チエ

ツクしてただけだ」

雅也「すぐ行くから」

裕司「あいよ（と出でいく）」

篤志「そろそろ行くか」

雅也「うんツ」

51 雪奈と猛のマンション（夜）

雪奈が帰宅する。

雪奈「ただいま」

スマホでゲームをしている猛が迎えて、

猛「お帰り」

雪奈「いやあ、今日は飲んだわ。みんなと集まるのは、確か夏以来だから四ヶ月ぶりだつたから」

猛「それでも、卒業してから毎年こうやつて会つてゐるなんてすごいね」

雪奈「まあね」

猛「うつちー、元気だつた？」

雪奈「うん。みんなとちやんと、いつも通り

にワイワイ楽しんでた

猛 「そりや良かつた」

雪奈 「やつぱりうつちーには、ああやつて笑顔でいてもらわないと。本当、無事に戻つてきてくれて良かつた」

猛 「例の件は解決まで時間かかりそうだけど、とにかくうつちーが元気でいてくれれば、俺たちはそれで十分だよな」

雪奈 「うん。次はきっと来年のゴールデンウイークか、夏になるとと思うから、またその時にみんなと会うの楽しみにしないとね」

猛 「その調子だと、もう飲めないかな?」

雪奈 「缶チューハイ一杯ならいけど

猛 「よし、じやあ飲もう」

雪奈 「オツケー」

52 木内家・玄関（数日後）

孝志が釣りの支度をしている——ドアが開き、雅也が出てくる。

孝志 「あれ、出かけるのか」

雅也「うん。そつちはまた釣り?」

孝志「ああ。堤防沿いで、ヤマメが結構釣れるんだよ。会社の後輩と行つてくる」

雅也「そつか」

孝志「結構釣れるから、フライにでもしようかな。今日飯は?」

雅也「夕方には帰つて来るから」

孝志「分かつた」

雅也「じやあ、行つてきます」

孝志「おお、行つといで」

53 カフェ

雅也と寧々がコーヒーを飲みながら話している。

寧々「元気そうで安心したよ」

雅也「まさか濱口にまで心配されるとはねえ。
(と苦笑して)俺も随分落ちぶれちゃった
かな」

寧々「同級生の中でも、結構話題になつてた
んだからね」

雅也 「 そ う な の ？」

寧々 「 由 紀 恵 つ て 覚 え て る で し ょ 」

雅也 「 もちろん 」

寧々 「 由 紀 恵 か ら 、 マ マ が 消 息 不 明 に な つ た
つ て 連 絡 が 来 て め 。 何 で も 由 紀 恵 の 知 り 合
い が 入 つ て い る 商 工 会 の 集 ま り で 、 マ マ の
話 が 出 た み た い で 。 そ れ で 、 地 元 に 残 つ て
る 同 級 生 た ち の 中 で 話 が 広 が つ た み た い 」

雅也 「 田 舎 じ や す ぐ 人 の 噂 つ て 広 ま る も ん ね 」

寧々 「 中 に は 、 も う 生 き て な い ん ジ や な い か
つ て 言 う 人 も い た ら し い よ 」

雅也 「 ま あ 、 あ な が ち 間 違 つ ち ゃ い な い け ど 」

寧々 「 …… 」

雅也 「 だ か ら か 。 新 し く S N S ア カ ウ ン ト 作
つ て 同 級 生 た ち フ オ ロ ー し た ら 、 D M で み
ん な し て 『 生 き て る か 』 『 今 ど こ に い る
だ ？ 』 『 大 丈 夫 か ？ 』 つ て メ ツ セ ー ジ が ひ
つ き り な し に 届 い た ん だ よ 。 小 学 校 と か 中
学 校 の 同 級 生 か ら も 」

寧々 「 そ れ ぐ ら い 、 マ マ が い な く な つ た 話 が

広まつてたつてことだよ」

雅也「随分お騒がせな人間になつちやつたね、俺も……」

寧々「まあ、生きてくれたらそれで良いよ。

私たちまだ若いし、いくらでもやり直せる
もん」

雅也「そうだね。確か濱口も、仕事辞めて専
門学校行つてたんだっけ？」

寧々「うん。高校卒業した後、自動車部品の
工場で働いてたけど、何か違うというか、
他の仕事もしてみたいと思つちやつて、仕
事辞めた後に看護の専門学校に三年通つて、
今は看護師だから」

雅也「結構変わったね」

寧々「でもね、正直工場で働いてた時より、
やりがいは感じてるよ。まあ日々命と向き
合う仕事だからっていうのもあるけどさ。
どれだけ一生懸命治療しても、結局完治せ
ずに亡くなつちやう患者さんもいるでしょ。
そういうのをずっと目にしてるから、なお

のこと、今回のママのことは気が気じやなかつたよ」

雅也 「ごめん……」

寧々 「いろいろ悩んでた様子は、SNSから見て分かつたけど、自分らしさを見失つたら、元も子もないよ」

雅也 「自分らしさか……」

寧々 「私はさ、高校時代の三年間、ほぼ毎日ママの顔見て來たでしょ。学校つていう環境もあつたかもしれないけど、ママは眞面目な時もあれば、楽しくふざけてた時もあつた。そういう切り替えができる、ママっていう個性的なキャラクターを自分で確立してたじやん。だからクラスで、圧倒的な存在感も見せてたし」

雅也 「（苦笑して） そうかなあ。あんまり、そんな自覚はないけど」

寧々 「自覚がないからこそ、それがママの自分らしさなんだよ。仕事で大変だった時は、きっとそれが出てなかつたんじやない。例

えばクライアントの言いなりになつて、自分自身のコントロールがちゃんとできなかつたとか」

雅也「（大きく頷いて）確かに、それについてはいろいろと思い当たる節があるけど」

寧々「やつぱりねえ。個性的な人間から個性取つちやつたら、何も残らないもん。まさしくママがそんな状態だつたんだよ」

雅也「なるほどねえ」

寧々「仕事は、どうするの？」

雅也「今は休養中だけど、そうそういつまでも休んでるわけにはいかないから、何とか近いうちに仕事復帰しようとは思つてるけどね。まあ、一度全部仕事を失つた身だから、ゼロから……いや、マイナスからのスタートになつちやうけど」

寧々「慌てることはないと思うよ。ちゃんと心身ともに回復してからでも良いだろうし。休んでるうちに、できることから始めてみれば良いじやん」

雅也「そうだね」

寧々「高校の時みたいに、ゆっくり読書したり、仕事じゃなくても、創作活動として小説とか脚本とか書いたり、こうやって昔から知ってる同級生たちに会つて気持ちを落ち着かせてみたりさ」

雅也「そういうふうに時間作つても良いかもしれないね」

寧々「そういうえば、奈良に行つた、志田の店にはもう行つたんだっけ？」

雅也「うん。オープン当日にね、お祝いのお花持つて行つてきた。メッセージカードに、勝手に『三年二組同級生一同』って書いて」

寧々「そういうことができるのが、ママなんだよ。まぜそば、美味しかった？」

雅也「そりやもう美味しかったよ。それがきっかけで、今じやすつかり俺もまぜそば好きになつちやつた」

寧々「クラスの誰かと、奈良まで行つて來たら？　志田も多分、知り合いが誰もいない

奈良県で一人、ませそばの店をやつてる
とがどれだけ心細いか」

雅也「もうオーブンから一年半は経つし、オ
ーブン以来行つてないから、顔出してみよ
うかな」

寧々「それが良いよ。あいつだつて喜ぶだろ
うし」

雅也「そうだね」

寧々「まあとにかく、ママにとつて一番大事
なのは、自分らしさを失わないこと」

雅也「ありがと。もしこれから何かあつた時
は、濱口のその言葉思い出すよ」

寧々「無理はせずに、ゆつくり復帰してね。
いつでも話は聞くから。まさか、こんな形
で成人式以来に会うとは思わなかつたけど」

雅也「俺だつて」

寧々「ちよつと、太つた?」

雅也「そりや高校の時から比べりや、十キロ
近くは太つたかもね。これでも、この一ヶ
月近くで少しは痩せたけど」

寧々「無理もないよね……」

雅也「ストレスの限界だったのか、吐き気がずっと止まらなかつたり、風邪でもないのにずっと咳が止まらなかつたこともあつてね。市販の風邪薬とか咳止め薬飲んでも、全然収まらなかつたんだよ」

寧々「ああ、多分それ『心因性咳嗽』ってやつだね」

雅也「何、その心因性何とかつて」

寧々「『咳嗽』っていうのは、漢字の通り咳なんだけど、心因性、つまりストレスが原因で起きる咳のこと。緊張状態の時は咳が止まらなくなるんだけど、リラックスしてる時とか集中してる時、あと眠ってる間は咳が出ないのが特徴」

雅也「ああ、多分それかもしけない。前までは本当に酷かつたけど、今は全然咳しなくなつたもん」

寧々「体は正直だからね。それに、ママは結構ナイトブルな感じがするから、きっと人間

関係とかいろんなものが重なつてストレスになつて、咳が止まらなくなつたんだと思う。自分でストレスつて感じてなくとも、案外ストレスになつてることもあるしね。だから今後は、そういう吐き氣とか咳が出てきたら、自分の中の黄色信号が点滅したと思ったほうが良いよ」

雅也「うん、それ意識してみるよ。（とタブレットを取り出して文字を打ち）えっと、『心因性咳嗽』ね。ああ、こうやつて書くんだ。うん、覚えた」

寧々「私は看護師だから、カウンセラーでも精神科医でもないけど、普段病気を抱える人を見るし、最低限の医療知識はあるほうだと思ってるからね。もし何か体の異変を感じたら、私に連絡して。（と思い出したように）あ、それにさ、ママと一緒にコンピュータ部にいた美彩だつて、今は看護師やつてるんだもん、いくらでも相談相手いるじやん」

雅也「言われてみれば、そうか。美彩とも何年も会つてないな。五十川君は大阪からこつちに戻つてきたって話は聞いたけど全然会えてないし、春奈は彼氏さんと一緒に同棲するからつて東京行つちやつたから、みんなで集まることもなくなつたけど」

寧々「環境が変わつちやうと、本当に集まらなくなるよね。地元を離れる子だつているわけだしさ」

雅也「うん。だから今日こうやつて濱口と会えてるのが不思議でしようがない。連絡くれてありがと」

寧々「一度、様子見ときたかつたからさ。まあでも、この感じなら大丈夫だね。由紀恵にも、ママは元気だつたつて伝えとくわ」
雅也「滝にまで心配かけてるとは思わなかつた。ママは何とか元気だからつて言つとい

て」

寧々「はいはい。確かに伝えときます」
笑い合う雅也と寧々。

54 木内家・全景(夜)

55 同・雅也の部屋

風呂上がりの雅也が入つてくると、机の上に置いてあるタブレットを手にする——操作をしている手が止まると、ホツと嬉しそうに微笑む。

56 同・事務所(表)(数日後)

雅也が原稿用紙に向かって万年筆で原稿を書いている——表に一台の乗用車が停車したことに気がつく。

乗用車のドアの開閉音がし、ドアが開き、賢哉が顔を出す。

賢哉「よう、生きてたか」

雅也「かどけん……」

賢哉「行くか?」

雅也「うん」

58 その車の中

運転席に賢哉、助手席に雅也。

雅也 「（ナビを見て）高速道路使つても、奈良県まで結構あるね」

賢哉 「到着時間、微妙だな」

雅也 「確かに今から行つても、昼の営業終わっちゃうね」

賢哉 「奈良つて、どつか時間潰すところあつたかな」

雅也 「奈良公園とか、石舞台古墳とか」

賢哉 「お前相変わらずチヨイスが渋いな」

雅也 「小六の時の修学旅行が京都と奈良だから、そのイメージが強くてさ」

賢哉 「ああ、そういうや俺も小学校の修学旅行は京都と奈良だつたな。京都タワーの下で、

木刀買つてさ」

雅也 「俺たちの同級生もいたわ」

賢哉 「お前どうせあれだろ、奈良潰け買つて

たんじやないのか」

雅也「何で分かるの？」

賢哉「お前の行動パターンは大体読めるよ。

直接会わなかつた期間はあつたけど、だて
に十何年もお前の友達やつてねえよ」

雅也「そうだね」

賢哉「志田は、お前が消息不明になつたこと
は知らねえ。俺のところにも連絡來たとき
はびつくりしたけど、地方にいるあいつに
まで伝えることはないと思つてさ」

雅也「そつか」

賢哉「奈良に行く前に、大阪にでも寄るか」

雅也「大阪？」

賢哉「大阪に『ボートレース住之江』つての
があるんだよ。せつかく関西行くんだった
ら、そういうところにも行つてみるか」

雅也「相変わらず、競艇好きなんだね」

賢哉「当たり前だろ。ボートレースは俺の：

⋮

雅也「第二の庭でしょ」

賢哉「分かってんじやねえか」

雅也「もう聞き飽きたぐらい、そのフレーズ耳にしてるから」

賢哉「それもそうだな」

雅也「もう子どもだって二人いるんだから、お父さんの真似したらどうするんだよ」

賢哉「俺だって親父に小さい時から連れていかれただんだ。このDNAはちゃんと受け継がないとな」

雅也「奥さんにどう言われても知らないよ。

あれ、今上の女の子が何歳になつたんだけ？」

賢哉「今二歳半」

雅也「確かに、下の男の子は年子だつたよね」

賢哉「ああ」

雅也「あれもびっくりしたよ。LINEのトップ画の赤ちゃんが、いつの間にか二人になつてるんだもん」

賢哉「特に誰にも言つてなかつたからな」

雅也「まあ、いちいち言わないか。俺も結局

誰にも何も言わずこうなつちやつたわけ
だから」

賢哉「それでもさ、お前はちゃんと俺に二人
目が生まれたことに気づいて、出産祝いく
れただじやないか。俺たちの同級生の中で、
お前ほど気配りができる人間なんていねえ
よ。本来のお前はそういうやつだつてこと
はよく分かってる。だからもう、過去のこ
とは忘れろ」

雅也「……うん」

賢哉「そこのサービスエリアで休憩するか。
トイレ行きてえわ」

雅也「俺も」

59 大阪・ボートレース住之江・全景

60 同・同・会場

レースが行われており、海上を六台の
ボートレースが走っている——観客席
でその様子を見ている客たち。その中

にいる雅也と賢哉。

賢哉 「（雅也に出走表を見せて） お前どう思
うよ」

雅也 「えっとねえ、1-4か1-5かな」

賢哉 「おお、良いとこつくな」

雅也 「ホント？」

賢哉 「じゃあ次は、二連単でやつてみるか」

雅也 「三連単じやなくて？」

賢哉 「いや、次は二連単にするわ」

雅也 「まあ、俺が買うわけじやないし、ここ
はベテランのかどけんに任せます」

賢哉 「よし、舟券買つてくる」

雅也 「うん」

× × ×

次のレースが開催されている——出走
する六台のボートレース。

雅也 「行けッ。行け、良いぞッ」

賢哉 「（雅也を見て） お、お前がそんなに力
入るなんて珍しいな」

雅也 「だつて予想当たつてほしいもん」

賢哉「（レースを見て大きな声で）おいおい
おいおい、行け行け行け、よしつつよし、
来たあツ」

雅也「（賢哉に）え、14？」

賢哉「おお。まあ予想が多いから、千円ぐら
いにしかならないけど」

雅也「けど、一枚百円のその舟券が千円にな
るんなら十分じやない」

賢哉「この千円で、志田のまぜそば食うか」

雅也「一人分にしかならないじやん」

賢哉「それもそうか」

微笑んでいる雅也。

61 奈良・コインパークリング（夜）

賢哉の運転する車が駐車する——運転
席と助手席からそれぞれ降りてくる賢
哉と雅也。

賢哉「（時計を見て）九時か、ちょうど良い
ぐらいだな」

雅也「閉店直前なら、志田ともゆつくり話せ

62 同・ませそば『ひばな』・店

カウンターだけのこじんまりとした店

舗。

最後の客が出ていく——厨房側で調理
をしている悠喜。

悠喜 「ありがとうございます」

と、そこへ、雅也と賢哉が入ってくる。

悠喜 「いらっしゃいませ。(と雅也たちに気
づいて) おお、待ってたよ」

雅也 「こっちに着く時間が微妙だったから、
かどけんと一緒に大阪の住之江競艇場に行
つてたの」

悠喜 「(賢哉を見て) 相変わらずだな、おつ

ちゃんは。まずは、久しぶり」

賢哉 「本当久しぶりだな。(と雅也を見なが

ら) こいつから、ませそばの店をオープン
したって話聞いたときはびっくりしたよ」

悠喜 「まあ、何とかやつてるよ。(と食券機

を指して）食券買つたら、ここ座つてよ。

もう多分この時間になつたらお客様さん来ないと思うし

雅也「ありがと」

賢哉「どれにしようかな」

雅也「迷うんだよねえ、どれも美味しそうだから」

× × ×

席に座つている雅也と賢哉——まぜそばを運んでくる悠喜。

悠喜「はい、醤油まぜそば大盛り二つ。煮卵、残り四個だつたから、それぞれ一個ずつサービス」

雅也「ありがと」

賢哉「サンキュー」

雅也・賢哉「いただきます（と食べ始める）」

悠喜「今日のボートレースはどうだつた？」

賢哉「珍しくこいつがエンジンかかつてた」

悠喜「へえ、木内がそうなるなんて珍しいな」

雅也「せつかく予想したからさ、その通りに

なつてほしいじやん」

悠喜「（後片付けをしながら）今日、この後
時間ある？」

雅也「良いけど。明日もお店でしょ」

悠喜「まあゆつくりはできないけど、すぐ近くにコンビニあるから、そこでちょっとダベろうかと思つて」

賢哉「良いぞ」

雅也「久しぶりに、この三人が顔揃えたんだもんね」

悠喜「ああ」

雅也と賢哉、美味しそうにまぜそばを食べ進める。

63 同・コンビニの駐車場（夜）
缶コーヒーを飲みながら話している雅也、賢哉、悠喜。

雅也「高校の時なんか全然勉強してなかつた志田が、あれだけ立派なお店開くなんて、本当にすごいよ」

悠喜「高校卒業してから、美容師になつたり、車のディーラーになつたこともあつた。自分でも、まさかまぜそばの店やるなんて思つてもみなかつたさ」

賢哉「奈良には、いつ来たんだ？」

悠喜「四年前かな。ディーラーの時、奈良の店に異動になつたんだよ。それで一年近くはそこで働いたんだけど、結局また違う仕事をしたいくつ思うようになつて、ラーメン屋で二年ぐらいかな、修業してそれで一年半前にあの店をオープンしたんだ」

雅也「解せ場なことかもしれないけど、結構資金かかつたんじやないの？」

悠喜「まあ信金からの借り入れは結構あるんだよ。だから今はとにかく、その分を返すのに必死でね。さすがに一人で年中無休でやるのは限界だから、アルバイトも雇つてるけど」

雅也「家賃とか光熱費とか人件費とか、結構かかりそうだもんね」

悠喜「木内のほうが、そういうのは詳しいか。
そつちだつて、事務所構えてやつてるじや
ないか」

雅也「けどうちは、プレハブを家の敷地内に
置いただけの事務所だから。家賃も人件費
もかかるないし、光熱費だつてたかが知れ
てる。かかつたのは、プレハブを設置する
ときの基礎工事と設置工事の分ぐらいだか
ら」

賢哉「それでも、木内も志田も一国一城の主
で頑張つてるじやねえか」

雅也「かどけんだつて、マイホーム買つたじ
やん」

悠喜「え、 そうなのかな？」

賢哉「ああ、 一年前にな。二人目が生まれた
時に、さすがにアパートじや狭かつたから、
思い切つて」

悠喜「すげえな」

雅也「高校卒業から、ちょうど十年経つて、
こんな話するなんて思わなかつたね」

悠喜 「人生何があるか分かんねえな」

雅也 「本当、人生つて分かんない」

賢哉 「……」

悠喜 「まあ、お互い何とか頑張るしかねえか」

雅也 「うん」

賢哉 「そうだな」

悠喜 「みんな、元気にしてる？」

雅也 「またみんなで会うか」

悠喜 「安代、どうしてるかな」

賢哉 「死んだんじやね」

雅也 「何てこと言うの。新聞の定年の欄に名前見なかつたけど、まだどつかで教員やつてるのか、俺が見逃してたかな」

悠喜 「マンション帰つたら、卒アル見てみよ
う」

雅也 「あ、俺も見てみる。懐かしい気持ちになるかも」

賢哉 「二年生までの写真載つてたら、俺も映つてるかもな」

雅也 「だね」

悠喜 「（笑つて）いや、今日は二人とも遠いところ来てくれてありがと。そうしょっちゅう来てくれとは言えないけど、また近くまで来たら寄つてよ」

雅也 「もちろん」

賢哉 「また食いに来るよ」

微笑み合う一同。

64 高速道路を走る乗用車（夜）

65 木内家・表へ乗用車の中（深夜）
賢哉の運転する車が停車する——運転席に賢哉、助手席に雅也。

雅也 「今日は、ありがと」

賢哉 「こちらこそ」

雅也 「志田も奈良で一人頑張つてるんだから、俺もまだまだ頑張らないとね」

賢哉 「無理すんなよ」

雅也 「うん」

賢哉 「今日、三人で会つて、高校時代の頃が

蘇つたよ」

雅也「俺も」

賢哉「みんな、元気にしてるかな」

雅也「してるよ、きっと。今回さ、かどけん誘つたじやん。実はね、この間濱口と会つて、クラスの誰かと志田の店に行つて來たらつて提案してくれたの」

賢哉「濱口つて、女子六人の中にいた、あの」

雅也「そう。成人式以来だつたよ。濱口も今、

看護師になつて医療現場で頑張つてゐた
い」

賢哉「そつか」

雅也「懐かしいね、高校の頃が。毎日時間割聞いてくる奴もいれば、テスト範囲を前の日の晩に教えてくれつてメールしてくる奴もいれば」

賢哉「俺は途中で辞めたけど、あのクラスは、お前がいたから成立したんだよ」

雅也「（苦笑して）そうかな」

賢哉「今日三人で集まつた時も、あの当時の

バランスが変わつてないような気がした

雅也「……」

賢哉「お前はあの頃と変わらない木内でいてくれよ。俺たちにとつては、大事な連れなんだからよ」

雅也「かどけん……」

賢哉「まあ、しょっちゅうは会えないかもしれないけど、お前のことは応援してるから」

雅也「ありがとう」

賢哉「住んでる場所も、働いてる環境も違つても、ちゃんと生きてりや、それで良いんだよ。人生なんていくらでもやり直せるんだから。俺なんて、どれだけ環境がコロコロ変わつてることか」

雅也「（苦笑して） そうだね」

賢哉「いやあ、久しぶりにお前と会えて良かつたよ。明日からまた頑張れそうだわ」

雅也「俺も」

賢哉「じやあな」

雅也「うん、ありがとう」

と、車から降りる——賢哉の乗用車が去つていき、手を振つて見送る。

66 公園（イメージ）

桜の木が満開になつてゐる。

67 木内家・全景（朝・数日後）

68 同・居間

真保が新聞広告を見ている。

真保 「（何かに気づいて）ん……？」

と、寝起きの孝志が入つてくる。

真保 「ねえ」

孝志 「何だ？」

真保 「これ見てよ（と広告を見せる）」

孝志 「これって」

真保 「このイベントって、二色がプロデューサスしてやつよね」

孝志 「雅がいなくなつたことでイベントができなくなつたみたいこと、この間の通知

書に書いてあつたけど、イベントでできる

じゃねえか」

真保「イベントの資金、どうなつてるんだろ」

孝志「え？」

真保「だつて、雅はお金貸したままなんだよ。お金も返さずに、次のイベント開催するなんて、一体どういうつもり……」

孝志「チラシを折り込みしたら、必然的に俺たちの目に留まることだつて分かつてはずだろ。わざと俺たちに気づかせようとしてるんだよ」

真保「私たちのこと舐めてるのかしら」

孝志「よし、このことも含めて弁護士に相談するぞ」

真保「……」

孝志「スマホもパソコンも、何なら金も返してもらつてない。そればかりか、一方的に悪者にされて、またこんなことされてるんだぞ。このまま黙つて見てられるか」

真保「そうね……」

雅也が、着せ替え人形の箱をラッピングしている——真保が入つてくる。

雅也 「どうしたの？」

真保 「二色が、イベントやるつて」

雅也 「え？」

真保 「今日の新聞の折り込みに入つてた」

雅也 「そう……」

真保 「父さんが弁護士と相談するつて」

雅也 「分かった」

真保 「あの女も何考えてんだか。（と雅也を見て）何してんの？」

雅也 「見りや分かるじやん。プレゼント、ラッピングしてるの」

真保 「ああ、あの……何ちゃんの誕生日プレゼントだっけ」

雅也 「いろはちゃんね。来月のゴールデンウイーク明けで、一歳になる」

真保 「いつ会うんだっけ？」

雅也「来週の土曜日。明美ちゃんも、その日
は仕事休みだから」

真保「ああ、ちょうど二色のイベントの日だ
わ」

雅也「……」

真保「公園の屋外ステージでやるイベントら
しいから、遠目で見てやろうかな」

雅也「本気……？」

真保「あんたを精神的に追い詰めた女の顔が
どんなのか、この目で見てやろうと思つ
て」

雅也「好きにしたら。多分俺、あの女の顔見
たら、フラッショバック起こしておかしく
なりそうだから」

真保「そう……」

雅也「（ラッピングを終えて）よし、できた」

70 総合公園（翌週）

来場客で溢れかえっている——真保と
健次郎が歩いている。

× × ×

特設ステージで、熱唱している知永。

椅子に座っている客や、立ち見の客が手拍子をしている——立ち見客の間にやつてくる真保と健次郎。

健次郎「あれが、二色知永……」

真保「よくあんな意気揚々と歌えるわね。人の息子散々な目に遭わせといて」

健次郎「あんな女に、兄貴は振り回されてたんだ」

真保「そうね」

健次郎「仕事がなかつたら、父さんにも見てもらいたかつたな」

真保「現場にいたら、何しだすか分かんないけどね」

健次郎「まあな……」

ステージで歌い続いている知永。

71 駅・改札前

明美が、ベビーカーに乗せた娘・いろ

は（1）と共に待つてゐる——紙袋を持つた雅也が出てくる。

雅也「お待たせ」

明美「良かつた、元気そうで」

雅也「（苦笑して）まあね。（といろはを見て）いろはちゃん、大きくなつたね」

明美「……」

72 水族館・館内

雅也とベビーカーに乗せたいろはを運んでいる明美が歩いて回つてゐる。

73 同・レストラン

雅也、明美、いろはが昼食を食べている。

雅也「（紙袋を渡して）はい、これ。いろはちゃんの誕プレ」

明美「ありがと。（といろはに）良かつたね、おじさんから誕生日プレゼントもらつたよ」

雅也「おじさんはないでしょ、せめてお兄さ

んにしてよ」

明美「いやいや、おじさんだつて」

雅也「まあ、いろはちゃんと同年代の人つてことだから、いろはちゃんからしたらおじさんになっちゃうか。（と苦笑して）それにしても、明美ちゃんもよくやつてるね。妊娠をきつかけに結婚するつて話聞いた時はダブルで驚いたけど、まさか臨月のタイミングで離婚するとは思わなかつた」

明美「あんな男に、いろはの父親をさせるわけにはいかなかつたからね。あのままモラハラが続いてたら、私もおかしくなりそうだつたから」

雅也「いろはちゃんが産まれた時に、出産祝い持つてつたでしょ。あの時、別れた旦那が酷い男だつて話は何とか聞いてたけど、今思えば、いろはちゃんのこと考えると、離婚して正解だつたのかもしれないね」

明美「でき婚で婚姻届出すだけで済ませたでしょ。もし盛大に結婚式挙げてたら、とん

でもないご祝儀泥棒になるところだった

雅也 「一年ちよい？」

明美 「そうだね。本当、スピード婚のスピード離婚だった」

雅也 「一人で子育てするのも大変なんじやない？」

明美 「あの男の妻でいること考えたら、天と地ほどの違いがあるんだから。この子がいてくれるから、私だって生きる張り合いがあるもん」

雅也 「お母さんに似て、たくましくて、元気で、先輩のことを先輩と思わない強い女の子になるかもね」

明美 「それ、私のこと？」

雅也 「先輩って思つてないでしょ、俺のこと」

明美 「思つてるよ」

雅也 「本当？」

明美 「本当だつて。先輩と連絡つかなくなつた時だつて、本気で心配したんだから」

雅也 「それについては、弁解も何もするつも

りありません」

明美「まあ何があつたかは聞かないけど、いろいろ大変だったのは察しがつくよ。でも、無事で良かった」

雅也「うん⋮⋮」

明美「これからも定期的に会おうよ。いろはにも会つてもらいたいし」

雅也「そうだね。SNSで、たまにいろはちゃんの写真見てると、どんどんお母さんに似ていくんんだろうなって思うし、何だか親戚のおじさんみたいな感じで見ちゃうんだよね」

明美「やつぱりおじさんなんだよ、先輩は」

雅也「よその子の成長は早いって言うけど、本当だよね。前に会った時は、まあ出産してすぐだつてこともあってこんな小さくて、ミルクもあげたでしょ。一年でこんなに大きくなるかな」

明美「夜泣きしたり、お乳あげないといけなかつたりで、正直大変な時もあつたよ。で

もさ、ある意味では、この子は私の分身みたいなもんでしょ。子どもは何歳になつても自分の子どもだし、私がこのお腹を痛めて産んだ子どもだから、何があつても守つてあげないといけないっていう責任も出てくるしね」

雅也「明美ちゃんも、たくましいお母さんになるだろうね。いろはちゃんも、こんなお母さんがそばにいてくれたら、心強いだろうね。学生時代から、いろんな意味で強かつたお母さんだから」

明美「まあ、それ否定しない。（と苦笑して）先輩とは桜も見に行つたし、いろいろ助けてもらつたよね。秋に見に行つた紅葉は枯れちゃつてたけど」

雅也「あつたね、そんなことも」

明美「今年は行けなかつたけど、来年は一緒に桜見に行こうよ。いろはも喜ぶだろうし。それに紅葉だつて、次こそは」

雅也「うん」

明美「一昨年だけ、夏にひまわり畑見に行つたよね」

雅也「行つた」

明美「じゃあ、夏もひまわり見に行こう」

雅也「良いよ。その都度、いろはちゃんに会えたら俺も楽しいし」

明美「父親がいない分、いろはには二倍の幸せを注いであげないとね。それが、私の義務だと思ってる」

雅也「……」

明美「父親のいない子どもにはしたくなかったよ。でも、あの男にだけは、いろはの父親を名乗つてほしくなかつた。親の勝手で母子家庭にはなつちやつたからこそ、いろはに寂しい思いをさせないようにしてあげるのが、母親としての義務であり、責任だと思つてる」

雅也「それだけの覚悟があれば十分だよ。俺も、どこかのおじさんっていう立場で、いろはちゃんの成長を見守るよ」

明美「ありがと。（といろはを見て）あ、どうりで静かだと思ったら、もう寝てるわ」

スヤスヤと眠つて いるいろは。

雅也「（いろはを見て）可愛い寝顔だね。こ

りや、また次に会える楽しみが増えたわ」

明美「もう少し大きくなつたら、一人で歩けるようにもなる。その時は、一緒に歩いてくれる？」

雅也「良いよ」

明美「はたから見たら、家族に思われるかもね」

雅也「まあ、絵面的にはそうなつちやうか」

明美「いろはに、偽物のパパだよつて言つちやおうかな」

雅也「俺の周りで炎上するからやめて」

明美「はいはい」

笑い合う雅也と明美——雅也、いろはの寝顔をもう一度見て微笑む。

真保と孝志が話している。

孝志「そつか。呑気に歌つてたか」

真保「はたから見たら普通のおばさんだつたよ。あんな女が、雅を精神的に追い詰めたつて思うと、人つて見かけによらないね」

孝志「どんな女か知らねえけど、裏表が激しいつてことだろ。さすがに観客の前でパワーハラみたいなことはしないだろうけど」

真保「感情の起伏が激しいってやつよね」

孝志「弁護士への相談、今度の水曜日、午後から休み取つたから、その時行くぞ」

真保「分かつた」

孝志「何が損害賠償だ。こっちがもらいたいぐらいだよ」

真保「イベント当日がバタバタだつたり、次のイベントができなくなるのは雅のせいだつて一人悪者にしてるけど、ちゃんとイベントだつてできてるもんね」

孝志「虚偽報告つてやつだからな。向こうにとつては、自分の首絞めてるつて気付かなんだろうな」

真保「多分向こうの代理人弁護士も、二色のイベントの状況までは把握してないでしょ」

孝志「二色の言いなりになつて書類作つただけだろ。多分、こつちが今回のイベント講演のこと突つ込んだら、どんな反応するかな」

真保「びっくりするだろうね。虚偽報告が不利になるつていうことは、弁護士なら分からんだろうし」

孝志「ああ、思い出すだけで腹が立つてくるわ。こんなにイライラしたの久しぶりだぞ、仕事でもこんなことにならないのに」

真保「人を怒らすのには長けるのかもね、二色は」

孝志「とりあえず、スマホとパソコンの返却、それからギャラと立替経費、貸した金の精算の相談だな」

真保 「払つてもらえないお金にプラスして、
こつちも慰謝料請求する？」

孝志 「当たり前だろ。雅は死にかけたんだぞ。
そこまで追い詰めたんだから、それ相応の
対応してもらわないとな」

大きく頷く真保。

76 同・事務所（夜）

タブレットを操作しながら、原稿用紙

に向かっている雅也。

雅也 「よし、できた」

77 広島・木内家・表（朝）

好乃が洗濯物を干している——一台の
軽自動車が入ってきて、運転席から素
子が降りてくる。

素子 「おはようございます」

好乃 「あら、早かったわね」

素子 「思つたよりも車が空いとつたんよ」

好乃 「お父さん、まだ寝よるわ」

素子「よう寝るの」

好乃「夜遅くまでテレビ見るのは勝手じやけど、つけっぱなしでいつも寝よるけえ困つとるんじや。私が夜中にトイレで起きる時に消しとるけど」

素子「いつものことじやろ」

好乃「本当に困つたもんじやわ」

78 同・同・台所

好乃と素子がコーヒーを飲んでいる。

素子「まあ君、あれから元気にしよるんか」

好乃「この間電話した時は、まだ声が元気そうやなかつたけどな」

素子「あのまあ君があんなことまでするなんて、相当悩んでたんやろうな」

好乃「真保さんから聞いたんじやけど、雅を追い詰めたっていう女人、逆に雅に損害賠償を請求するっていう通知書を送つてきたらしいわ」

素子「え、そんなことになりよるんか?」

好乃「結局正式に損害賠償を請求するつてい
う連絡は特に来てないから、ただの脅しだ
つたんじやないかって真保さんは言うとつ
たわ」

素子「脅しなんてしたら、またまあ君参つち
やうやろ」

好乃「そうなんよ。雅のこと、相当恨んどる
んやろうか」

素子「ある種の、大人のいじめつてやつかも
しれんね」

好乃「無理なんてせんでもええわ。ちゃんと
生きてえくれりや。私にとつては大事な
孫なんじやけ」

素子「そうじやね」

と、ドアが開く音がする。

好乃「あ、お父さん起きたな」

と、彦藏が入つてくる。

素子「おはようございます」

好乃「お目覚めですか」

彦藏「何や、素子来よつたんか」

好乃「今日ご飯食べに行くつて、昨日言った
じやろ」

彦藏「わしや聞いとらん」

好乃「どうでも良いことは覚えといて、肝心
なことは忘れよる」

彦藏「（素子に）ホルモン作つたけえ、持つ
てくか」

素子「うん、ありがと。いただきますわ」

好乃「（時計を見て）昼時だと混むけえ、そ
ろそろ支度するかね。（と彦藏に）着替え
用意しとくけ、早う着替えてや」

彦藏「分かつとるわ」

好乃「はあ、全く……」

と、ブツブツ言いながら出ていく——
苦笑して見ている素子。

79 木内家・事務所（朝）

雅也が入つてくると、デスクに座る——
机の上に、雅也と浩平が映る写真の
入つた写真立てが立てかけられている。

雅也 「おはよう、眞榮田。今日も頑張るわ」

80 雪奈と猛のマンション

雪奈と猛が出てくる。

雪奈 「鍵かつた?」

猛 「バツチシ、行こ」

雪奈 「うん」

出ていく雪奈と猛。

81 京都・篤志のアパート（朝）

リモート会議をしている篤志。

82 工場（朝）

製造ラインで働いている賢哉。

83 奈良・まぜそば『ひばな』・店

仕込みをしている悠喜。

84

病院・病室

患者の点滴交換をしている寧々。

いろはの乗ったベビーカーを引いて散歩している明美。

86 駅・表（一ヶ月後・夜）

乗用車が停まり、助手席から雅也が降りてくる——運転席に健次郎。

雅也「じゃ、行つてくる」

健次郎「帰り分かつたら連絡しろよ」

雅也「はいはい」

87 飲食店の並ぶテナントビル・全景（夜）

88 同・個室居酒屋・一室

雅也、雪奈、篤志が集まっている。

雅也「ごめんね。ゆきちゃんにも時間作つて

もらつて、あつぽんにもわざわざ京都から

篤志「うつちーから誘われたんだ。すぐ飛んでくるよ」

雪奈 「私だつて」

雅也 「ありがと。実はさ、進展つてわけじやないんだけど、二人にはいろいろ話しどかなきやと思つてね」

雪奈 「例のプロデューサーの件?」

雅也 「うん。先月ね、うちの親が名古屋の弁護士事務所に行つて、相談に行つてくれたの。イベントができなくなるつて言つてたのに、ゴールデンウイークの時、イベントやつてたつて話したでしょ。その事も踏まえて、向こうに指摘したの」

篤志 「それで、どうだつた?」

雅也 「(苦笑して) 通知書送つてきた勢いはどこへ行つたのやら、全く無言を貫き通してる」

雪奈 「え、逃げてるつてこと?」

雅也 「逃げてるつて言つても、事務所の場所は分かつてゐるの」

篤志 「じやあ、直接攻めちやえれば良いじやねえか」

雅也 「それが出来たら苦労しないよ」

雪奈 「できないの？」

雅也 「前に届いた通知書に書いてあつたの。これからは代理人弁護士を通じてやり取りをするから、直接やり取りするようなことがあれば法的手段を取るつて」

雪奈 「散々振り回しといて、都合が悪くなると逃げるなんて、結局自分が不利な位置にあるつて言つてるようなもんじやん」

雅也 「だから、これからどうしてくかは、弁護士さんと相談して進めてく。ただ、これは俺にとつては結構長い戦いになりそうなの。相手が相手だから、この件が解決するまでには時間がかかるつてことは、自分でも分かつてゐるから」

雪奈 「……」

篤志 「……」

雅也 「スマホもPCもないから、相変わらず連絡は取りにくいんだけど、このまま解決するまで何もしなかつたら、俺、何もでき

ないでしょ。だから、中古で安いパソコンがあつたから、それで仕事進めることにした」

篤志「そつか。まあ、特にうつちーの場合、パソコンがないと何の仕事にもならないもんな」

雅也「うん」

雪奈「早く、パソコンとか戻つてくると良いね」

雅也「もし戻つてきたら、サブパソコンみたいな感じでやつてくるよ。片方でパソコン操作して、片方でリモート会議やつたりとか」

雪奈「そつか、そういう使い方もあるもんね」

雅也「ただ、事務所としては一旦たたもうと思つてゐる」

篤志「『オフィスツリーイン』、締めちやうのか？」

雅也「あんなことがあつて、結局元の取引先とも連絡取れないし、とてもじやないけど、これだけ期間が開いたら、前みたいな仕事

はできないでしょ。だから、ちょっと規模を縮小して、リニューアルしようと思つてね」

雪奈・篤志「リニューアル？」

雅也、鞄に入ったクリアファイルから、一枚の紙を取り出す——『脚本家・岩島雅』と筆文字で書かれている。

雅也「『岩島雅』。俺の、新しいペンネーム」篤志「何だろ。ペンネームなのに、文字の羅列から、うつちー臭が漂つてる」

雅也「え？」

雪奈「確かに。『木内雅也』でも『うつちー』でもないのに、『岩島雅』って文字見たら、何故かうつちーっていう感じがする」

雅也「結構考えたほうなんだけどな。『岩島雅』としてのSNSのアカウントも作り直したし、タブレット使つて、ホームページも作つたんだから」

雪奈「早いね、準備が」

雅也「まずは形から整えていかないとね」

篤志 「『岩島雅』か、良い名前だな」

雅也 「本名で活動すると、あのプロデューサーにまた攻撃されそうな気がしてさ。そのリスク回避でもあるの」

雪奈 「それは利口な判断かも。私ね、猛から教えてもらつて、あれから『ガスライティング』について調べてみたの。それにね、えつと……『自己愛性パーソナリティ障害』つていうのにも当てはまつてると思つたの」

雅也 「『自己愛性パーソナリティ障害』？」

雪奈 「そう。（とスマホを取り出して）『自分は特別な存在であり、他人よりも優れているという根拠のない感覚があつて、成功や権力、理想的な愛についての空想にふける。他人からの過剰な賞賛を常に求め、それが得られないと不機嫌になつたり怒つたりする。他人の感情やニーズを理解したり、それに寄り添つたりすることができない、あるいはしようとしない。他人を利用し、傲慢な態度をとつたり、批判に過敏に反応

して激しく怒つたりするといった行動に繋がる』だつて』

雅也「めちゃくちや当たつてる。イエスマンみたいに、自分に従つてくれないとすぐ不機嫌になつたの。俺が意見言つた時も、

『口答えした』って言われた』

雪奈「（スマホを見ながら）発言に一貫性がないのは、どう？』

雅也「うん、あつた。昨日と今日で言つたことが百八十度違つた。だから指示がめちゃくちゃで、いろんな準備が大幅に遅れたこともあつた』

篤志「そんな奴に振り回されて、うつちーも本当に大変だつたな』

雪奈「ストーカーみたいに、相手を執拗に追い詰める特徴もあるから、ペニネームで活動再開するのは、賢明な判断だよ』

篤志「今の時代、ましてやずっと本名で活動してきたうつちーだから、名前検索されたら一発で分かつちやうもんな』

雅也「そう。だから『岩島雅』っていう新しい名前で、生まれ変わったつもりで、再スタートしようと思つてさ」

篤志「そつか」

雅也「広島にいる時ね、おばあちゃんに言われたの」

×

（フ ラ ツ シ ュ ）

広島木内家の台所での好乃。

好乃「今日であんたは一回死んだ。今日から生まれ変わったつもりで、人生やり直すん

や

×

雅也「……」

×

雪奈「そう、そんなことおっしゃったんだ」

雅也「あの言葉を聞いて、生まれ変わるためにどうしたら良いのかなと思つてたんだけど、

その結果が、これ」

雪奈「うん……うつちーが、そう決めたんな
ら、良いと思うよ」

雅也「ありがと。（と篤志に）あつぽんには、『うつちーコーナー』に並べる作品なくなつちやうけど……」

篤志「どんな名前だろうが、うつちーはうつちーだろ。中の人と同じなら、それで良いじやねえか。それに脚本つてなると、

YouTubeとかアプリ配信とか、そういうドラマだつてこれから増えてくだらうし」

雅也「うん。まあ、どこかのタイミングでフリーペーパーとか、前みたいに形に残るようなものも作れたらなって思つてる。あつぽんは、俺にとつての大事なファン一号だからさ、いつかきっと、物として渡せるものを作れるよう頑張る」

篤志「うつちーのタイミングでやれば良いさ。俺は、いつでも待つてるから」

雅也「ありがと」

雪奈「でも良かつた。うつちーが、ちゃんと復活してくれて」

篤志「本当だな」

雅也「俺ね、広島から戻ってきても、正直頭の中では、死ぬことばかり考えてたの。どうやつたら確実に死ねるのか、そんなことばっかりね……」

雪奈「……」

篤志「……」

雅也「一度は、向こうで地元の造船会社の会長さんに助けてもらつたけど、それでも生きる望みがつかないままだつた。心身共にボロボロで、まるで何かに操られてるような状態だつた。けど、ゆきちゃんが、猛さんとうちに来てくれたことがあつたでしょ。あの時、ゆきちゃんが俺の顔見た途端に泣き崩れたのを見て、目が覚めたの」

雪奈「……」

雅也「俺は今まで何してたんだろ、どうして死のうなんて考えてたんだろうって。俺が死んだら、ゆきちゃんやあつぽんだけじゃない、同級生たちは悲しむだろうなって気付いてさ。俺、こんな身近な人を悲しませ

ようとしてたんだと思うと、自分の行動が恥ずかしくなつたぐらいだもん。あの時、ゆきちゃんが猛さんと来てくれなかつたら、俺は今でも復帰できるような精神状態じやなかつたと思う」

篤志「ゆきちゃんの涙が、うつちーを変えたつてわけだ」

雅也「うん、そういうこと」

雪奈「私は別に、そんなつもりじやなかつたんだけどね。あの涙は、うつちーが無事でホツとした安堵の涙と、心配かけた怒りの涙だつたかもしれない」

雅也「まあ怒るのも無理ないよね。いきなり姿消しちやつたんだから。本当にごめんなさい」

雪奈「もう良いよ。私たちは、うつちーが元氣でいてくれたら、それで良いんだから」

篤志「俺も。おかえり、うつちー」

雪奈「おかえり」

雅也「……ただいま」

篤志「よし、乾杯するか」

雅也「え、さつきやつたじやん」

篤志「あれは、いつもの形式的な乾杯だろ。」

今からやるのは、うつちーの新しい門出を

祝う乾杯なんだから」

雪奈「そうだね。乾杯しよう」

雅也「うん。じやあ、改めて……」

一同「かんぱーい」

と、それぞれのグラスを持つて乾杯する。

89 同・表

エレベーターから出てくる雅也、雪奈、
篤志。

90 繁華街（夜）

雅也、雪奈、篤志が歩いている。

雅也「こんなに楽しい時間、久しぶりかも」

雪奈「これからも、こういう飲み会には付き

合つてもらうからね」

雅也「学生時代は、俺だつて幹事やつてた時
もあつたんだからね。前よりかはお酒弱く
なつたかもしけないけど、お声がかかれば、
どこへだつて行きますよ」

篤志「それぐらいの勢いがあれば大丈夫だ」
雅也「うん」

雪奈「次、どこ行こうね」

雅也「まだ飲めるかな」

篤志「軽くで良いかな」

雅也「俺も。多分、このままだと寝ちゃいそ

う

篤志「寝んなよ」

雅也「はいはい」

談笑しながら、夜の街に消えていく雅

也、雪奈、篤志。

おわり